静岡県方言の過去表現について

山口幸洋

一　概況と経過

静岡県中部方言[注1]（以下静岡方言という）は、動詞過去形としての、イッケ（行）、サイケ（咲）、キケ（来）、ノンゲ（飲）などを備えている。

一方には水窪方言[注2]というものがあって、これにはケがない代り、イッツ、サイツ、キツ、ノンズなどに現われる、ツがあるのである。

このケとツは用法が全く対応し、同じ文法的意味を有するもので、両者ともその体系内においては、イッタ、サイタ、キタ、ノンダなどに表わされるタとは区別して用いられるという点に特色がある。その区別は結局「過去」と「完了」の区別に相当すると見ることができるであろう。これには「話手自身の動作には通常、ケが用いられない」という区別も加わっており、人称別に近い性質を認めていくのがよいかとも思われるが、「話手以外の動作についても完了表現にはタを用いる」のであるから、タは一人称というように決めてしまうわけにはいかなかった。又、極めて稀な場合に応じて、自分の事にケを用いる場合も発見されてきた。このような文法差異の原理を解き明かすのはむずかしい。当事者達にはむずかしくも何でもないことなのに、他郷の者には容易にその実態がつかみにくい。研究者は自己の抽象による枠にこだわり、方言の話手達はあくまで具体的に、そして部分的にしか説明しないのである。[注3][注4]

静岡県のこの事実に触れたのは早く、新村出、東条操の両先達であったが、もちろん解決済みだったのではない。しかしその後ずっと、地元の研究書、論文（省略）に一切登場していないのは無残なほどである。私も昭和30年に井川方言のケに注意したのち[注5]、水窪方言のツによって始めて、タとの区別を知ったが[注6]、真相を究め得はしなかった。更にその後、春野町、本川根町のケに接して[注7]、このケが「ツ」と、ほゞ同じ性質のものであると考えたときも、区別の本質を考察することは控えざるを得なかった。そして41年に南伊豆地方でケに接したのち、ようやく全県下の調査を志ざして、多くの話者に接した結果、全貌が明らかとなってきた[注8]。それによると、最近の共通語化の情勢下において、水窪のツは健在だけれど、分布の広いケは衰退いちじるしく、昔日の面影を失ないつゝある。しかし、形

容詞過去形ほかの場合のケはかなりよく使われ、地域的にも更に広がりをみせるなど、種々の言語地理学的興味をよぶ問題も、ここにはあったのである。

だが変化の様相や分布については稿を別に改めることとしたので、ここでは、国語文法の参考上、重要な問題として大いに吟味さるべき「ケ」（又は「ツ」）と「タ」の区別の意義について、詳しい考察を試みたいと思う。

（注）

1　駿河のほゞ全域。西南端の大井川町、及び吉原市から東の駿東郡にかけては、この主流派ではない。次に、遠江の本川根町、中川根町、川根町、春野町は主流派に加わる。

なお本稿では、対訳その他の煩をさけるため、特定の一村方言ではなく私の作った文例を使用する。作製にいたるには、静岡市曲金、井川村井川及び田代、大川村坂ノ上、本川根町田代、中川根町久保尾、川根町大和田及び石上、春野町篠原等方言の自然観察（談話録音を含む）及び、静岡市羽鳥・山梨新作（明38生）、梅ケ島村六郎木・市川重明（明36）、清水市袖師・高橋いつ（明45）、富士川町松野・小林某（明32）、島田市大草・沢井加一（明26）、同六合・成岡さと（明32）、同南町・植松享平（明32）その他全域において多数の土地人に対した質疑をもとにした。右の方々はなかでも格別に優れたインフォーマント達であったと思うので、後日のためお名前を掲げて、この際感謝の意を表したい。

2　遠江磐田郡水窪町と、佐久間町旧城西村、旧山香村、旧佐久間村羽ケ庄地区に行われる。

3　明治34年言語学雑誌中の「語学涓滴」

4　「土のいろ」八ノ五「静岡方言の重要性」。但し3、4ともに、中村通夫「助辞〝け〟について」より孫引き。

5　近畿方言学会「東条操先生古稀祝賀論文集」中の「井川方言語法実際」

6　「国語学」34所収「水窪――語法にみる遠州山地方言のサンプル」

7　「静岡県本川根方言の文」

8　昭和43年春季国語学会にて発表。

二　完了形の意味

通常の日本文法説においては一般的に、「た」の意味が「過去」「完了」「存在」のように分けて説明されるとすれば、その「過去」は時間的にのみ扱う傾向があるようである。(注1) しかし実除には、それらがタに統一されていてその区別がない以上、動詞の場合はすべて完了形というカテゴリーで包括することも可能になる。(注2) 現在完了的事実を「過去」というカテゴリーで説明することはできないが、過去の事実を「完了」というカテゴリーで説明することはできるからだ。要するに日本語の動詞の完了形は、現在的な完了と、過去を含む完了とを区別しないで表わす、というべきであるかもしれない。

このようなとき、静岡方言の事情はきわめて興味深いものである。すなわち、動詞直接の場合以外にタが用いられることはなく、タは、動作をあらわす動詞（「ある」以外のすべての動詞）の次の場合に行なわれて、後に述べる、ケと区別される。

第一に、殆どの場合の「自分の動作」である。

昨日ワ沢山釣ッタヨ
俺ワ今朝八時ニ起キタ
若イ時ワ歌手ニナロート思ッタ

第二は、他人の動作、又は自然事象に関する「自分の認定」を示す場合。

その一「現在完了的な事実」について。

誰カガコノ部屋オ出テイッタ
ヒョータンカラコマガ出タ
キレーニ咲イタネ
ア、来タ来タ

なお「尖ッタ棒。着物オ着タ人」式の連体用法もこの部類であるとする。但し「サー、行ッタ行ッタ」式の命令的用法は当方言に本来なかった、という報告を、水窪、井川にて得たことがある。

その二「過去の事柄であっても、（証拠を目前にみるなどして）それを今、確認する」場合。

（ぬれた庭を見て）ユーベワ雨ガ降ッタネ
（よごれたズボンを見て）マタ、ドロンコ遊ビオシタ！
コノ字ワ先生が書イタ
イクツ拾ッタ？

その三「過去の動作、事柄が具体的に生じたこと、そのことにポイントをおく叙法」として。

昨日ワ雨ガ降ッタ
アイツガ一番ニナッタ
兵隊ニ行ッテ死ンダ
彼ワ何々学校オ卒業シタンダネ

これは、事柄自体はケの対象と共通であるが過去の特定の主体や時日について認識新たに述べるという意味あいをもつ。したがって事実をなまなましく感じさせる。通常「モー～シタ」とか「～シテシマッタ」「トートー～シタ」のようないかたはこれに属するし、実際には「モー」やそれらが用いられなくても、それを言外にこめていう場合がこの夕のいいかただとも言える。ケのいいかたとの違いかたは、同じ事実を指しても、「モー二時ダ」と「マダ二時ダ」があり得るような、そういう性質の違いかたである。

一面では、動詞によってそういう意味のもとにおかれやすい動詞と、そうでない動詞とがあることも考えられる。「成る。済む。終る」などは前者である。又、過去のことでも「今年」とか「今日」「今朝」の類の時間規定のもとで表わされる動作も、タを用いやすい。「今朝オ客サンガ来タ」は「サッキオ客サンガ来ケ」よりも以前でありえたりする。だが絶対ではない。英語では yesterday, last night, the other day, などの副詞に関連しては過去時制が用いられ、過去の事柄であっても、this morning, this week, this year, などの副詞のもとでは現在完了形が用いられる事が多い（注2）というが果してどんなものか。

だが右の第二全体（その一～三）の事情は英語の「現在完了」と結局同じである。英語における「現在完了」と「過去」の対比の考え方は次のようにあくまで相対的なもので、これは静岡方言にもあてはまる。

現在から隔っているという感じの強弱は、必らずしも実際の現在からの距離の長短に比例するのでなく、かなり主観性の強いものであり、事情によってはすぐ前のことも過去と把握され、とき

には反対にかなり以前のことも現在と深い関係あるものと把握される。(注4)

私は静岡方言のタとケの区別には、殆ど英語の現在完了と過去の別に匹敵するものがあると考える。もちろん静岡方言の場合は、「自己の行為」については、すべて完了形のタで表わす、といったところで英語と大きく異なる。しかしそういう「自分の認定」が「自分の動作」と同じカテゴリーを形成して一般的な過去形と対立関係を構成するというところは、静岡方言的完了法ともいうべき独自性なのである。

(注)

1 国立国語研究所編「現代語の助詞助動詞」、明治書院日本文法講座6「日本文法辞典」、国語研究所論集「ことばの研究」第2集中の鈴木重幸「現代日本語の動詞のテンス」等はその立場か。

2 松下大三郎「標準日本口語法」、日本文法講座1「総論」中の金田一春彦「時・態・相および法」にその説明をみる。

3、4 研究社英文法シリーズ11福村虎治郎「時制と態」P35ほか。

三 過去形の意味

ケ(又は、水窪のツ)が用いられるのは、前項タの場合を除くすべてで、まず形容詞の過去形は、たとえば「無い、寒い」の場合なら、ナイッケ、サムイッケ或いは、ナカッケ、サムカッケ(水窪方言では、ナカッツ、サムカッツ)のように。動詞否定の過去形「行かない。見ない」の場合なら、イカナイッケ、ミナイッケ或いは、イカノーッケ、ミノーッケ或いは、イカナンゲ、ミナンゲ或いは、イカナッケ、ミナッケ或いは、イカンケ、ミンケ(以上、地域により異なる。水窪イカナンズ、ミナンズ)のように。次に形容動詞の過去形は、「楽だ、気の毒だ」の場合なら、ラクダッケ、キノドクダッケ或いは、ラクナッケ、キノドクナッケ(水窪〜ッツ)のように。指定の「だ」の過去形は、「春だ」なら、ハルダッケ(水窪ハルダッツ)のように。それらはすべてケ(又は、ツ)である。この場合は自分のことでも

アーアー、面白イッケ
欲シクテタマンナイッケ(と手を出す)

ようにケを用いる。

動詞中、特に存在詞と呼ばれもする「ある」という語は、その過去形はアッケ(水窪アッツ)が殆どである。

(探しものが見つかったとき)コンナトコニアッケ

といいうる。

それらは完了形なのではないのである。方言の純粋な話手達はその場合にタを用いない。私の行なった榛原郡本川根町方言の自然談話の録音中にも、百二十三個の形容詞過去形はすべてケで、タの例はなかった。(注1) 形容詞の場合も、指定の「だ」の場合も、そのケ(水窪方言のツ。以下略)は、共通語や浜松市方言などのタと全く同じものなのである。これらを一般的な過去形とよぶとき、次にいう一般動詞につくケの場合も、それは過去形であるとするのが最も妥当である。意味的にも明らかに「過去」を話題にしている。

動詞に直接つく形でケが用いられるのは、第一に、他人の動作や自然現象における「過去の事実を人に向って話す場合」である。こ

れを次のように、二通りに分ける。

その一「特定的な過去の時点の動作」。

彼ワ何々学校オ卒業シケヨ
オジーサンガ死ヌ時コー言ッケネ
昨日ワ雨ガ降ッケガ……
サッキ誰々ガ来ケゾ

その二「幅広くばくぜんと不特定的にとらえた過去の、一回限りでなくその間にわたって存在した動作」(「行われた」というより「存在」したととられるべき動作)。

アノ辺ニワ花が咲イケナ
オジーサンワヨク酒オ飲ンゲヨ
昔ノオ祭リワモット盛大ニヤッケ
痘瘡デ子供ガ何人モ死ンゲ
去年ワヨク雪ガ降ッケダ
昨日ワ鮒ガ釣レケデ……

右の「その一」はとらえかたにより容易にタの立場と交替しうる。タの第一の「その三」がそれに当るのである。この事情は英語における過去と現在完了の使い分けにもあるのと同様であること、前述した通りである。

第二としては、ケは通常「自分の動作」は表わさないが絶対皆無というのではなく、昔の不連続的多数の経験を語るときに少し認められることが注意されよう。たとえば、

昔ワヨク山デ狐オ見ケヨ

は一般的事実を語っているが、これには「自分」の見たことも含まっていることになる。例外的にこの「見ケ」は、誰かが「居た」意味に代えて右のように、よく用いるらしいがなお調査を要する。次に

俺トユー人間モ(昔ワ)ズイブンワガママオ云ッケダ

のように自分を他人ごとのように扱う場合や、

アノ頃ヨク酒オ飲ンダリシケヨ
小サイ時、親類ノ家ニ行ッタリシケガ……

のように「何々したりした」の「した」のような迂回的な言い方において、ケが現われる。いずれも方言の現状としては、きわめて稀に無意識的にしか行われないようで、通常は後述するような「タッケ」のいいかたが代って用いられるのである。

以上について私は、それを「過去」形とみる。この過去形という考え方に対して、その用法はテンスというよりアスペクト乃至ムードに属するのであり、「過去」とよぶより「回想」とよぶべきだとする意見のありそうなところである。しかし「回想」は過去を回想することだとして、「過去形」に添加する性質とする方がなおふさわしい。静岡方言のケは過去形そのものを担うのであり、付帯する回想ではない。東京語では、行ッタッケ、春ダッタッケ、寒カッタッケにおけるケが、多くはタに添えられる形で、そして言い切り的に用いられるので、「回想した事実を詠嘆的に述べる」[注2]として良いであろう。しかし静岡方言はそれにとらわれる必要もない。ともするとわれわれは中央の現状をもとにして、春ダッケのようないかたについても、それを春ダッタッケの変形ないし略形であるかのようにばくぜんと思ったりし、更にそれ以外のすべてのケもそれに従がわしめて考えやすい。この場合その事情は逆で、おそらく静岡方言の方が、歴史的にも文法的にも本来の秩序を保っているのであ

る。これは言語地理的にも、江戸時代の文献からもほぼ証明されようが、考察は別の機会にゆずる。

このように静岡方言の「ケ」は、一般の動詞につく上で、「タ」（「自己の認定」「自己の動作」を表わす）と対立する意味と、それに制約された用法を持っている。「ツ」も同様、「そのことを人にむけて話す」というのは、つきつめると次のような意義をもつのではなかろうか。すなわち「人に話す」ときは当然「自分がすでに知っていること」を人に話すのであり、「すでに」という点がイコール「過去」になるであろう。又、「知っていること」すなわち「知識」という点もこの場合のひとつの鍵である。「自己の動作」や、或いは、その時表出される「自己の認定」は日本語の観念では「知識」ではありえず、それを知識とする——いったん客体的なものとして意識する——とき、時間の推移を伴なったものとされるわけである。

（注）

1 「静岡県本川根方言の文」

2 「現代語の助詞助動詞」

四　過去完了法の存立

これまでに述べてきた静岡県の「ケの方言」には、～ケや～タのほかに、～タッケという過去形も存在する。「ツの方言」には～タッツがある。ケやツのないタ一本の方言にも、～タッタがある。三者の持つ意味用法はそれぞれ同じである。タッケは東京語のタケと引当てられて「過去回想」の語法とみなされるのが通例であろうが私は賛成しない。現代東京語の限定された文末助詞的な姿に比し、方言のはもっと活潑である。タッケは「過去回想」だと強く主張する人も、タッツやタッタについてはいったんちゅうちょするであろう。東京を主に考える習慣がある証拠ではないだろうか。この語法が東京標準語（これに関して、その源流は本州西部方言と思われる）にないため、静岡県のみならず本州東部に広く分布するのに、国語文法上正当な位置が与えられて来なかったのである。以下は、あえてタッケの形を使って論を進める。

ソーユーコトー何度モ聞イタッケヨ

「行ッテクル」ッテ言ッタッケナー

昔ナラ雨乞イオシタッケガ……

ヨッポド止メヨート思ッタッケ

ドッチー行ッタッケカ

語形からも察せられる通り、これは「完了」のタの過去形である。自分の行為や自分の確認が特に過去のことであるという場合に用いるが、これの共通語訳としては「聞いたことがあった」「言ったのだった」のようであろうか。(注1) 注意深く観察すると、なかには癖として、自己の過去的な動作はすべてこの形を用いる個人がある。

キノーワカゼオヒータッケデ会社オ休ンダッケヨ

は、訳としては「風邪を引いたので会社を休んだ」とされてもしかたがないようなものだ。過去と完了の対立ありとはいえ、過去形が非常な衰微をしている今日、この「完了の過去形」がそれに代ってかなり幅をきかせていることも事実である。

オジーサンワヨク酒オ飲ンダッケヨ

アノ辺ニワ花ガ咲イタッケガ……

キノーワ雨ガ降ッタッケナ

これらと、さきの「過去」の用例との意味上の差異について客観的な基準を求めることは、むずかしい場合がある。もっとも英語にも「過去」と「過去完了」が等しい場合があるというから、それはとりたてて問題にならぬかもしれぬ。[注2] また、ひとつひとつの用例にあたって、解釈文法的に、表現文法的に説明するとなれば、「過去の回想」「完了の念押し、強調」「過去の確認」「不確かなことを思い出す」など、いずれもの解釈がその場その場で適用可能である。ある時は「大過去」「過去の過去」という解釈が当りそうになることもある。だが、過去という抽象的な時点を基準にして更に過去を設定するというのも変だし、あまりにも遠い過去のことが話題になれば「想い出す」要素や「不確かな」要素が備わるのは又、当然である。実際には、

アイツナラサッキモ来タッケヨ

のようにさっきのことでも言いうるのである。これらと普通の過去形と比較すると、次のような相違があると思う。すなわち、

死ヌ時オジーサンガコー言ッケ

は、今現在その言ったことが何らかの形で拘束力を持ちえ、

……コー言ッタッケ

だと、そこまで行かず、過去のことは過去のこと、もう済んだこととして話すから直接には影響しない。現在との何らかの関わりは一応棚において、過去のそういう事実の有無にピントを合わせる。よい例として少し大げさになるが吉田書簡のことでいうとわかりやすいかもしれない。

吉田元首相ガコー言ッタッケ

というと、それはもはや吉田書簡にとらわれまい、そのことはそのこととしておく立場の発言となりえ、

コー言ッケ

というと、書簡の効力を直接持ち出した形になる。別の例、

コノ花ワ今年ノ春ニ咲イケヨ

は、花の正常な活動について判断を下すとかのための材料であるが、

咲イタッケヨ

といえば、現在に関わりなくあの時咲いたという事実を述べるにとどまり、もう過ぎたこと、というニュアンスが前面に出る。

これらにはひとつの共通する意味、すなわち「その動作は以前においてすでに終えている」という芯（核）がある。この意味は、文法上「完了形の過去形」という体系上の位置に立っているのである。これは、英文法でいう「過去完了」法とほゞ匹敵すべきものと私は考える。この存立は、当方言における「過去」と「完了」の分別事実と関連するものであろうと想像されよう。

なお都市部における近時の傾向として、形容詞や指定の「ダ」にも、寒カッタッケ、ソーダッタッケのような、タッケのいいかたを耳にする。これは寒カッケやソーダッケと同じ意味を表わすにすぎないとも思えるが、或いは回想の立場を表明する語法の独立進展を示す事象であるかもしれない。といっても東京語の真似なのであり、山村地帯には未だない。しかし又、タッタの地域（ケもツもないが、過去完了形としての、～タッタを有する地域――静岡県天竜川西の浜松方言など）には形容詞の場合に、寒カッタッタが稀にある。文法的、通時的には類推に起因しようが、寒カッタということのタ（過去）の部分の強調的な役割を果すようである。

（注）

1　NHK「全国方言資料」には本州東部諸方言にしばしば登場し、このような対訳があてられていることが多い。

2　福村虎治郎「時制と態」P39

五　静岡方言のテンスの体系

このような過去表現の区分には、同じ事柄に対しても異なる話手の立場や態度が関係するところが大きい。したがって

日本語では、文法上の時の体系が不明確で、西欧語にみられる過去・現在・未来の三分法、その他の体系をあてはめることはできない。それは、日本語の時性観念が言語主体の心的態度と密接に結びついているためで、日本語において、時性区分をすることは、意味がないとさえいわれている。(注1)

のように、よくいわれる。日本語の古文における「時の助動詞」も「回想の」或いは「詠嘆の」というように、ムード的な文法形式とされやすい。

しかし、テンスとアスペクト、更にムードがそれぞれあまりにも濃い結びつきを示すのは決して日本語だけの特性ではなかった。文法カテゴリーの区分上、それらの交錯は諸国語にてもつねにひとつの課題となるようであって、たとえば英語における「過去」と「現在完了」も、ときには同一事象に対する、見方の入れ代りにすぎない場合がある。通時的には英語の過去形と完了形の区別がむずかしいというのは通説で、ドイツ語にても、フランス語にても、ラテン語にても、それが更には歴史的にも現代語にも、そのような錯綜はあるという。(注2)諸外国語を通覧するのは常に興味深いが、その結果、細江逸記氏のように「動詞の Tense なるものは本来思想様式の区別を表わすものである」といい、現在形や進行形等とともに、むしろムードに属し、テンスなる独立の範ちゅうを認めないとするのはいかがなものか。(注3)それを強調するあまり、断面の別の切り取り方の可能性を見失なうことに、私は賛成でない。

金田一春彦氏は模範的なテンスの変化の例をエスペラント語で示され「現実の言語ではこのような整った三つのテンスをそろえてもっているものは探しにくい」(注4)といわれたが、やはり英語の河合茂氏が次のように述べられたことと暗合するのはおもしろい。

文法範疇には意味と形態とが共に考慮に入れられる。そのとき単一の形態がいつも単一の意味を示すことは人造語においては可能であろうが、歴史的社会的所産である実在の言語ではそうなっていない。人造語と言えども、時の経過を経れば、実在の言語のようになるであろう。(注5)

つまり、うらがえせば、テンスに伴なうアスペクトやムード的な表現は、歴史を持つ言語に必然の特性であろうということになり、そこから得る私の感想は、細江氏とは逆に、日本語の過去表現の解釈上、いかにアスペクトやムードの基準を立てることが必要かつ有益であっても、テンスの枠はいぜんとして生きている、というところにある。この際、中島文雄氏の次の言を引用しておきたい。

時間意識がわれわれの最も根本的な表象の modus に帰せられる以上、これが何らかの言語表現を見出すのは当然のことである。そしてその言語表現が動詞の語形変化とか不定詞に一定の助動詞をつけるとかいふやうな形式をとる以上 Tense なる文法範疇は躊躇なく認められると思ふ。この際現在、過去、未来の表現形

式が多義的であることは、言語の本質上避けがたいことであるが、これをもつて時間意識を疑ふのは誤まりである。(注6)

静岡方言における区別は、自分の動作についてはタがほゞ専用され、他人や自然事物についてはタとケが使いわけられる、というアスペクティックなものであるが、区別はあくまで「現在」に相対的な「過去」(「絶対的」ではない)に関するもので、「補い合う分布」をなす関係にあるとみられる。しかも、この関係は当静岡方言において、「推量」と「能動」をあらわすラとズの関係にもみられるものと好対照をなす点、注目すべきものである。すなわち、自分の動作に関してはズが用いられ、他人や自然事物についてはズとラが使いわけられるのを、「未来」に関する「補い合い」の関係とみるとすれば、「過去」と「未来」とは上の図のように左右対称を構成することがわかる。とかくの詮議もある終止形は、Past と Future をふりわけ、それぞれに相対する役割をもつという体系的見地から Present (現在)としての位置づけが許されよう。これは、テンスの体系を現実的に浮びあがらせるものである。

他	ラ	(終止形)	ケ	タッケ
自	ズ		タ	

(注)

1 「日本文法辞典」時の助動詞

2 福村「時制と態」、英文法シリーズ12太田朗「完了形・進行形」

3 「動詞時制の研究」(泰文堂) P178

4 前記「時・態・相および法」

5 大修館書店クェスチョンボックスシリーズ6「時制・法・態」の解説より

6 「文法の原理」(研究社) P208

六 未来表現について

静岡方言(この場合、静岡全県下に共通するものとみられたい)の用言における「推量」形は、通常、終止形プラス「ラ」である。動詞ならば、行クラ、見ルラのように、形容詞ならば、無イラ、寒イラのようにいう。世間的には、ソーズラ、雨ズラのズラの方が知られているが、ズラは指定の助動詞といわれるダの、その推量形というべきで、ラを仮に助動詞とするにしても、ズラはそれと同列に扱うべき独立した助動詞ではない。ズラはふつうは体言につくが、それは「そう。雨」の推量形としてではなく、「そうだ。雨だ」の推量形としてあらわれるのである。形容動詞の場合、楽ズラ或いは、楽ナラであるが、これはその終止形に、楽ダ、楽ナの二通りのいいかたがあることに由来する。又行クズラ、見ルズラ、寒イズラ、行カナイズラのように用言につくことも実際には多いが、これは、行クダ(行くのだ)見ルダ(見るのだ)寒イダ(寒いのだ)イカナイダ(行かないのだ)の推量形としてなのである。

世間的にこのラとズラの違いが殆ど理解されないのは、むしろこれと対訳される共通語文法の方に責任がある。共通語の文法も決して理路の正しいものではなく、方言的な類推と誤用の伸展したものが混じっていることを注意したい。すなわち方言の、行クラ、寒イラが共通語の「行くだろう、寒いだろう」に対応するところから、ラもズラも「だろう」の意味のように考えられるのは誤まりである。ズラは体言格の語につく。用言につく場合は「〜のだろう」の意味である。共通語が「行くだ。寒いだ」などといわないのに「行

くだろう。寒いだろう」とはいうところが変である。なお、ズラは近年東海道筋の西部から、ダラに押される動きをみせている。しかしラとズラ（又は、ダラ）の区別は全県にわたって異同はない。

さて、静岡方言においては、右の推量形に対し、いわゆる「意志、推量」形が別個の形態素「ズ」をもって表わされる点が改めて注目されよう。動詞未然形につくズは、行カズ、降ラズ、見ズ、食ベズのようであって、土地により或いは人により、行カーズ、見ーズ、又は、行カス、見ス、又は、行カース、見ースのようにいうことがある（スの場合は、助詞カを伴なって反語的表現に用いられる傾向が強い）。浜名湖以西では、行カー、見ーのいいかたが優勢。しかし老人を通じてみれば、ズは全県下にまんべんなくある。用法は次のようである。

第一に、一人称の能動的意志表現。

サー行カズ（さあ行こう）
今日中ニ帰ッテコズヨ
ヤラズト思ッタラヤル
食ベズトシタガヤメタ（食べようと……）

第二は、他人や自然事物の能動的動作。

雨ガ降ラズトシテイル
誰々ガアッチエ行カズトシタラ……

第三は、能動的推量。

アシタワ雨ガ降ラズヨ（降りましょう）
アイツダッテソレグライ出来ズ（出来よう）
ソノウチニヤメズ（やめるだろう）
アシタワ雨デアラズ（雨であろう）

これらは「意志、推量」というよりは「能動」ということばで一括した方がよい。第三の用法などは、かなり「推量」に近いが、動作が当然そうなるという意味をこめて述べられるもので、ラよりも確信の強い推量、予測される未来というニュアンスがある。これに対しラは、自分の推量を公開してただしたり、又、相手の意向を確かめようとして「相手にむかって」話しかけるという立場が表わされやすい。例えば文末助詞「カ」と同じような上昇調、或いは下降調の文末アクセントが伴なう。ともあれ、ラは他人や自然事物について用いられるのがふつうで、自分の行為について用いることがあるとすれば、次のような場合である。明日ワ漁ニ出ルラ。（五人ナラ）酒二升グライ飲ムラ。のように、自分を含めた多勢の行為を他人ごとのように予測するとか、俺ダッテ飲メルラ。のように自分の行為を可能動詞で迂回的に云うなど。

これら推量形や能動形に関する詳しい紹介は別の機会に待つほかないが、この場合のラとズの組が過去表現のケとタの組と対称をなしてテンスの体系を構成することについては前述した通りである。

なお、左右対称の比較上異なると思われる点は次のようである。「ある」という動詞や形容詞、形容動詞等において、Past ではケだけがつくのに、Future ではラがつく場合（アルラ。寒イラ。楽ズラ）と、ズがつく場合（アラズ。寒カラズ。楽デアラズ）があること。ラは相手に話しかける推量、ズは独白的な推量を表わす。次に「完了」にはその又過去形、すなわち過去完了があることが左右の対称をなさない点である。自分の事でも稀には無意識にケを用いることがあるという点は、対称図には示さなかったが、それと同程度に自分の行為についても推量にラを用いることがある点で相殺した。

七　諸方言及び、上代語などとの比較のために

静岡方言のテンスにならって他の方言の考察に進むならば別図のようである。

関東方言の中には少数の語に限り動詞にケが直接つく方言がある。(注1)江戸方言もそうだった。(注2)又、池上二良氏報告による群馬県中里村方言(注3)その他は、(注4)殆ど静岡方言と同質のものかと推定されるほどであるが検討の余地もあり、比較は今後の課題である。この種の現象は非常に調べにくいため、静岡県と群馬県とその他をつなぐ空白地帯は調べ落されている可能性が大であって、それを暗示するかのような注1、4等の断片的な報告例もあるわけだが、今は全般に不足不満の面を指摘せざるを得ない。

a　一般関東方言

ベー	(終止形)	* タ	タッケ 又は タッタ

b　浜松市方言

他	ラ	(終止形)	タ	タッタ
自	ス			

c　東京方言

他	ダロー	(終止形)	タ	タッケ
自	(ウ), ヨー			

d　一般関西方言

他	ヤロー	(終止形)	タ
自	(ウ), ヨー		

e　丹後方言

(ウ), ヨー	(終止形)	タ

東京方言のタッケは、静岡方言をはじめとする本州東部一般のタッタやタッケより意味用法が狭い。又、東京方言、一般関西方言の(ウ)、ヨーは、浜松のスよりも意味用法が狭い。丹後などにある、アシタワ雨ガフロー、ソレグライデキョーのようないかたも、東京などで口語としては用いないとしなければならない。(注5)

このような比較研究は言語地理学的にも完成させる必要がある。たとえば静岡県に限ってそれをみ、位相別にもみていくと、そこには完了形タの用法が、過去形ケを押しのけようとする様子を認めることができる。これは先に述べたように、「完了」は「過去」を含みうるが「過去」は「完了」を含みえないという原理にのっとっていることは明らかである。国語史においても、上代から中世、近世にかけて時の助動詞が、本来は「完了」のタに統合されてきた事実、又、諸外国語においても同様の傾向が指摘される事実(注6)に思いあわされる。

ところで我々の一大関心事として、上代日本語における、いわゆる「回想」の「き、けり」対「完了」の「つ、ぬ、たり、り」という区別と、静岡方言との比較を忘れるわけにはいかない。細江逸記(注7)氏は、「き」は目睹回想、「けり」は伝承回想で、主として前者は自己の経験の回想、後者は非経験の叙述だという。そのような区別は静岡方言にはあるのか。しかし当方言の「タ」は、自分の動作と自分の認定を現在完了的に表わすものだから「き」的ではなく、やはり完了の「たり」に近い。又、「ケ」は自分の知識を述べるというところに意味用法の幅を持つが、大筋としては「けり」に近いとい

えるのである。春日和男氏[注8]は「けり」が自分の動作に用いられるときは、自己を客体化しているものであるという注目すべき御見解を発表せられたが、それなら静岡方言の「ケ」は一層近い。上代語法の研究と方言の実情は、今後大いに参照し合う必要がある。

方言のケやツには推量形（ケラ、ツラ）を除いて活用らしきものがみられず、従がって仮定形もないのは、上代語法と用法上大きく異なる点である。方言の、「完了」には仮定がありうるが「過去」には仮定がありえないという事にも意味上、一理認められる。又、方言の完了形にはその又過去形すなわち過去完了形があるということと、これらが本州東部全域にかたよっているという全国分布の問題などを考えあわせると、形態的にはケとタの差として表わされている過去と完了の別は、上代中央語の遺存というだけで済ませられない点を感じる。水窪方言のツは、意味的にはケと同じものである以上、上代語の「つ」が方言的に転用されたとしなければならないが、転用させた力は方言の方にその前からあったというべきである。

なお水窪のツには、寺田泰政氏によって

キネオショッツ　タテウスオショッツ

（杆を背負ってたて臼を背負って）[注9]

というような用法があることが発見されたが、これはツの連用中止法というより、接続助詞「つゝ」に近いもので、きまって二回呼応する特殊なものであることがその後判った。

また私は奈良県下北山村で

ジューゴロッピキツッツルワカ

（十五六匹釣ったよ）

のような「ツル」を採集した。このツルは動詞だけにつき、意味は「完了」的であることも、ここで報告しておこう。

注

1 「方言学講座」第二巻「青森」（此島）「秋田」（北条）「岩手」（小松代）「宮城・山形」（斎藤）「福島・茨城・栃木」（宮島）「群馬・埼玉」（上野）など参照。

2 湯沢幸吉郎「江戸言葉の研究」。中村通夫「東京語の性格」中の「助辞〝け〟について」

3 群馬大学「国語研究」第一巻四号所収「雨が降っけ」

4 大場とし子「東京都西多摩郡青梅町方言」（未見。池上氏論文より孫引き）。また江戸時代の関東諸地方の様子は、中村通夫「助辞〝け〟について」に述べられている。

5 中村通夫「東京語における意志形と推量形」（「東京語の性格」所収）

6 イェスペルセン「文法の原理」半田一郎訳P383。太田朗「完了形・進行形」

7 「動詞時制の研究」P127〜。「動詞叙法の研究」（泰文堂）P48〜。

8 「存在詞に関する研究」（風間書房）P243

9 「土のいろ」復刊26所収「奥遠州水窪町のアクセント」

あとがき

本稿は昭和43年度国語学会春季大会にて発表したものの理論的な分について書いたもので、実態の分布と用例については、別の機会を予定している。

柴田武、都竹通年雄、徳川宗賢、林弘、寺田泰政、以上の諸氏からは何かとご教示を得たり、文献をお貸し頂いたりした。ここに厚く御礼申しあげたい。